

留学・研究計画書

氏 名 辻 大和	留学機関名 ソウル大学校 人文大学
留学先国名 大韓民国	留学期間 西暦 2008 年 3 月 ~ 2010 年 2 月
研究テーマ 16～18 世紀 朝鮮王朝の対外貿易政策：薬用人蔘の輸出入への対策を中心に	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>1.研究の目的と問題背景</p> <p>研究目的は、16～18 世紀朝鮮の国内経済と外国貿易との関係を、薬用人蔘に関する朝鮮政府の施策に注目して解明することである。当時の東アジアでは日本の銅・銀、中国の繊維製品が国際的に流通していた。朝鮮も東アジア貿易に参加したが、東アジア貿易に対する朝鮮の姿勢と、貿易と朝鮮国内の経済との関連は未解明である。朝鮮の役割は重要であったとされるが具体的に明らかでないのである。申請者は朝鮮特産品であった薬用人蔘の動向に注目した。貿易の決済手段であり中国に朝貢する銀を確保するために、朝鮮は外国に朝鮮人蔘や繊維製品を輸出していた。</p> <p>2.先行研究の状況</p> <p>朝鮮政府の薬用人蔘貿易への関与姿勢に関する研究は少ない。今村鞆の『人蔘史』（朝鮮総督府専売局、京城、1934～1940）は朝鮮の人蔘政策を説明した画期的な研究であったが、朝鮮政府の「悪政」と一方的に断定した。呉星『朝鮮後期商人研究』（一潮閣、ソウル、1989）は人蔘商人の活動形態を分析した。日朝貿易の当事者である対馬の史料を分析した田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社、1981）は近世日朝貿易の展開過程を明らかにしたが、朝鮮国内の動向は触れていない。近世では外国との通商は政府の直轄事項であり、民間の自由な意思で行えなかった。先行研究では政府の貿易政策に関する分析を欠いて商業の問題が議論されている。</p> <p>3.これまでの研究内容と研究課題</p> <p>申請者は卒業論文において薬用人蔘の産地での政府による管理政策と調達方法について分析し、18 世紀に政府は薬用人蔘の調達に主体的な役割を果たしていたことを明らかにした。修士論文では 17 世紀初頭の人蔘貿易に着目し、朝鮮から中国への人蔘輸出が急増した背景を解明し、同時期に朝鮮の人蔘商人政策がはじめて打ち出されたことを明らかにした。</p> <p>博士課程進学後は 17 世紀中葉以降の薬用人蔘政策の全容を解明すべく、研究を進めている。具体的には①1638 年薬用人蔘をはじめて朝鮮商人が輸出した背景、②17 世紀末に薬用人蔘が輸出禁止された背景、③18 世紀初頭に人蔘産地で供給が減少した要因、の三点を分析する。</p> <p>4..テーマの意義</p> <p>学術的に本研究は 19 世紀以前の東アジア経済の状況解明に一石を投じる。前近代の中国と日本の経済については外国との経済関係についての研究が進展している。そのような研究が不足していた韓国朝鮮研究に、本研究は朝鮮の外国との経済関係の事例を提供する。日本社会では江戸時代および韓国朝鮮に関する関心が高まっているが、江戸時代の朝鮮関係に関する日本語の研究は極めて少数である。本研究は歴史学的分析の事例を社会に提供し、韓国朝鮮理解の一助となる。</p>	

成果報告書

記入日 2010年 2月 28日

氏名 辻 大和	留学先国名 大韓民国	所属機関 ソウル大学人文大
研究テーマ：16～18世紀 朝鮮王朝の対外貿易政策：朝鮮人蔘の輸出入への対策を中心に		
留学期間：2008年 3月～2010年 2月		
<p>2008年と2009年の二年間にわたって松下国際財団の松下アジアスカラシップの助成をいただき、大韓民国において標記の課題について留学生活を送ることができた。以下では所属機関、研究活動、現地調査に分けて記述する。</p> <p>1.所属機関</p> <p>韓国では2008年の一年をソウル大学、2009年の一年を西江大学に所属しながら研究を進めた。所属大学が変更になったのは1年目の延長手続きに失敗したためである。</p> <p>1.1 ソウル大学</p> <p>1年間、人文大学国史学科で訪問学生として滞在した。研究室の個人机が与えられるなど好待遇であった。ソウル大学は1948年に開学した韓国を代表する総合国立大学である。当学科は韓国史に関して古代史から現代史までの教育・研究を行う機関である。教授陣が8名、大学院生も100名程度とおそらく韓国最大の韓国史研究者養成機関である。同世代の大学院生との交流は知的な刺激が多く、今後の韓国研究において大きな財産になるのは確実である。</p> <p>これらの教育プログラムについては、国史学科での演習授業に参加した。夏学期と冬学期には「奎章閣」（朝鮮王朝記の史料を所蔵する機関。ソウル大のなかにある）の史料に関する演習に参加し、奎章閣史料の性格や利用について理解を深めた。担当教授が奎章閣の元館長、現主任であったこと、学生の発表（史料について考察を加えたもの）が多かったのがよかった。</p> <p>1.2 西江大学</p> <p>西江大学は1960年に開学したカトリック系大学であり、社会科学、人文学の分野で著名なスタッフが多い。西江大学では国際地域文化院の研究員として在籍した。図書館には充実した専門書があり、研究の助けになった。9割近くが開架であること、国内外の学術雑誌を豊富に揃えている点がよかった。</p> <p>西江大学は以前より外国の留学生、研究者の受け入れに積極的であり、ソウル大学より留学生の姿をキャンパスでよく目にする。</p> <p>これらの所属機関の国際地域文化院は、外国との学生や研究者の派遣および交換を担当する部署である。博士論文執筆者ということで、研究員としての待遇を受けた。とくに授業や課題の負担はなかった。主に歴史系の教授陣、大学院生と交流の機会をもった。</p>		

2 研究活動

ソウル市内の資料館、図書館において研究主題に関連する文献の閲覧や複写に従事した。以下では奎章閣、国立中央図書館、国史編纂委員会の三ヶ所ごとに概要を述べる。

2.1 ソウル大学奎章閣

奎章閣は朝鮮王朝の王室図書館を起源とする資料館である。ソウル大学内に独立した建物として存在し、スタッフは国史学科と密接な関係を持っている。ここで閲覧、収集したものは朝鮮時代後期の文献である。特に16～18世紀の外交、貿易関係史料を集中的に複写することができた。具体的には1610年代～1860年代の間に現在の釜山にあった地方行政機関(対馬との直接の外交窓口)である東萊府とソウルの礼曹(外交担当の官庁)の間を往来した公文書控について、集中的に収集した。また近接するソウル大学中央図書館には植民地期の京城帝国大学時代に収集された文献があり、日本で入手不可能なものも多数あることから、複写作業を部分的に行った。

2.2 国立中央図書館

朝鮮総督府図書館の蔵書を継承した図書館である。朝鮮時代の資料について充実したコレクションを形成しているほか、植民地期の文献も豊富である。

当館に所蔵される資料については朝鮮王朝期については、奎章閣にある史料を補助する性格になるが、マイクロフィルム化されていない(複写作業が困難)ものが多いため、奎章閣資料を複写後に確認するようにした。また、20世紀以降の人蔘に関する先行研究(圧倒的に日本の植民地期)に関する文献で国立中央図書館に所蔵されるものについても収集した。具体的には北朝鮮に位置する平安道江界府の地方誌、植民地期情報収集力が優れていた警察発行の雑誌(民情調査のためのもの)に接することができたのが最もよかった。

2.3 国史編纂委員会

国史編纂委員会は1948年に設立された国立の歴史研究所である。同委員会が国内外で収集した文献を閲覧できるほか、植民地時代の朝鮮史編修会が収集した文献類も閲覧することができる。ここでは特に中朝関係資料、日朝関係資料の閲覧に取り組んだ。対馬宗家文書を集中的に閲覧することができた。日本の対馬から戦前に購入された宗家文書については、閲覧量および複写量(一日100枚以内)の制限のため想定より複写時間がかかった。そのなかでも、対馬に東萊から発せられた外交文書原本が17世紀前半だけでも700点近くあり、他所には所蔵されていないものであるため、その複写に全力を注いだ。従来の研究では、朝鮮側は朝鮮王朝の中央で後に編纂された年代記、日本側は対馬や江戸で後代に編纂された史料集が主に用いられてきたため、史料原本を用いることで、新しい知見が得られることが期待される。

また、当委員会が海外(日本、米国、中国、ロシアなど)における資料収集事業を通じて蓄積したマイクロフィルムの閲覧、調査を平行して行った。交通の便が悪い海外諸機関の資料を同委員会で効率的に見ることができ、大きな利益を得ている。1920年代に朝鮮総督をつとめた斎藤実の蔵書のマイクロフィルムも調査した。

これらの資料館で収集した文献は現在分析作業を進めている。早い時期に学会発表や論文のかたちで成果を公表する予定である。

3 現地調査、巡検

現地ではソウル、釜山、対馬といった関係地で現地調査を行うことができた。また、他の旅行で全羅南道、大邱、忠清南道、慶州などの主要地も回った。

3.1 ソウル

ソウル市内の朝鮮時代の遺跡は多数訪ねることができた。また周辺部の登山によく行った。郊外では坡州や漣川にある朝鮮時代の官僚の墓地、水原の城、江華島の寺、仁川港などをまわることができた。

3.2 釜山

朝鮮側の日朝通交の窓口となる釜山には二回ほど現地調査に出かけた。

一回目は2009年6月である。釜山大学にて日韓関係史を専攻する教授を訪問し、釜山大学の研究施設を見学したのち、特に釜山の街区構成や遺跡、史料状況について教授していただいた。翌日には釜山市内に三箇所ある倭館(対馬藩の出先事務所であり、外交交易はここで行われた)跡地を訪問した。1610年代まで使われた倭館の推定存在地は1920年代に埋め立てにより面影を失っていたが、船溜り(薩摩掘と戦前呼ばれていた)がかすかにその姿を留めていた。1610年代～1670年代までの倭館跡地は道路用地となっていると想像されたが、海面からの比高がそれほどない(5メートル以下)ことがわかった。1670～1870年代の倭館跡地は公園となっているが、路地の構成が等高線に合わせて蛇行するものであり、旧時の海岸線を推定する材料となった。

二回目は2009年9月である。釜山港の出口にあたる絶影島は対馬にもっとも近く、航路の目印となる。ここから釜山港の沖合いを視認することができた。また、釜山タワーから釜山港を眼下に見下ろすことによって釜山港の全体像を確認した。釜山近代歴史館では釜山港の近代化の足跡をかたる資料群を閲覧することができた。

二回の調査を通じて、倭館当時の釜山港のもようについて知る手がかりを十分に得ることができた。

3.3 対馬

2008年10月にはソウル大学国史学科の学科旅行で釜山から日本の対馬島(長崎県)に赴き、日朝交易をささえた港湾施設、歴史史料の保存館(長崎県立対馬歴史民俗資料館)などを訪問した。韓国人の学生、教授陣と日朝交流の最前線を訪ねたことで大いに刺激を受けた。

4 感想

韓国の大学院生、教授陣との接触は私の調査に大きな助けとなった。韓日関係史学会の月例会には幾度も参加し、専門を同じくする研究者の知人が増えた。また、韓国歴史研究会という大規模な学術団体の分科会に出席させてもらえるようになり、韓国における対外関係史研究の動向について知ることができた。

韓国で二年間にわたり長期滞在したが、私にとって留学前までの滞在は最大で3ヶ月程度のものでしかなかった。したがって1年というサイクルを二回繰り返したことには大きな意味があった。四季の変化は日本のそれに準じるものの、その変化の速度がはるかに激しいものであった。ずっと寒かったのがある日突然春になる、野山に花が咲き乱れる、という展開である。夏の場合、ある日梅雨が始まるのである。冬も同様で突然冬将軍がやってきた。このような変化は言葉で聞いていても体感すると大違いである。朝鮮時代の年代記を読んでいて季節変化が背景にある場合、これまで実感がわかなかったが現地に滞在してみるとよくわかるような気がした。

ソウルでの生活は大変快適であった。松下国際財団の支援によって資金面の心配がほとんどないおかげであった。ソウルでの生活水準は日本の都市と変わらない水準であり、外国人であるからといって差別的な扱いを受けるわけではない。ソウル首都圏の生活水準はほぼ先進国なみと言

ってよいのではないだろうか。先進国なみのものとしては、はりめぐらされた鉄道網、高速インターネット、顧客第一のサービス業といったものを挙げられるかと思う。ほかの地域への留学生の苦勞談を聞くと韓国の都市部は実に先進国であるという認識を深めることになる。

研究については、韓国で生活しながら、ないし史料を見ながら研究を進めて行くことの重要性を感じた。日本で朝鮮研究を行っている研究者、学生は実に少数であるが韓国では人数が多いだけでなく非常に裾野が広い。したがって分野も多様化されている。地域研究の舞台となる朝鮮を離れて朝鮮研究を行う重要性も、もちろんあるが、現地での文脈、同時代的な現象を十分におさえるべきであろう。理念としてのみ朝鮮、韓国を認識しているということにならないよう、現地で作業をする必要がある。